
IS インフィニット・ストラトス ~その意思が全てを変える~

殺鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～その意思が全てを変える～

【Nコード】

N8606X

【作者名】

殺鬼

【あらすじ】

もし、歴戦のレイヴンたちがISの世界に転生したら……。そんな妄想から生まれた話です。

はじめに

どうも、『殺鬼』というものです。

・初めて小説を書きます。

・ちなみに文才は皆無です。その点をふまえて読んでください。

・タイトルからも分かるようにISとACのクロスです。

僕は一夏のハーレムが好きではありません。出てくるヒロイン全て(虚さんを除く)が一夏に惚れるというのはいらないと思います。一人くらいは「一夏嫌い」という女の子が出てきてもいいと思うんですよ。

なぜACとのクロスかというと、世界最強の兵器同士が戦ったらどっちが強いのかなと疑問に思ったり、殺し殺されの世界で生き残っているレイヴンたちにISの『女尊男卑』はどう映るのか、と考えたからです。

学生なので更新は不定期ですが気長に待っていてください。

では、始めます。

プロローグ レイヴン編(前書き)

短いです。

プロローグ レイヴン編

「私は、私はこのようなところでは死ねんだ！」

目の前にいるのは復活したバルヴァライザー粉砕者。そのフォルムは以前撃破した飛行型バルヴァライザーに酷似しているが中身は全くの別物だった。

すでに機体は満身創痍と言ってもいいほど破壊されている。APは残り35%ほど、弾薬はほとんど尽き残りは右肩のKINNARA（一回分）と右腕のPIXIE3（2マガジン）そしてCRヘッド-WL79LB2のみ。見れば機体の各部から火花が散っている。

バルヴァライザーは私を嘲笑うかのように砲撃形態へと移行する。周りには障壁が張られ如何なる攻撃も通さない。そして、この状態から放たれるのは拡散型ではなく一点集中型。当たればひとたまりもないがここで死んではジャックやエヴァンジェ、ジナイーダに会わせる顔がない。だから

「消えてもらおう」

放たれるレーザー。

レイヴンは機体を左右に振りこれを回避、ブースターを全開にして突っ込みありったけの弾をぶち込む。

ミサイルは半数が迎撃されるが残りマシンガンは全て直撃。即座にパージしブレードを振るう。それはバルヴァライザーのブレードを破壊する。そのまま腕を振り上げコアに突き刺す。

地に伏せるパルヴァライザー。ここで予想外のことが起きた。

『頭上に高エネルギー反応を確認』

頭部AIが知らせてくれたが遅かった。レイヴンは光に飲み込まれ、

『レイヴン！ 応答して、レイヴン！』

ただオペレーターの声が空しく響くだけだった。

こうして最後にして最強のレイヴンが消えた。

ブローグ レイヴン編(後書き)

感想・意見など待っています。

プロローグ 一夏編(前書き)

前回と違って長くなりました。原作などと違ったところがあれば教えてください。

最近、原作より二次創作のISのほうが面白いと感じてしまう私。

プロローグ 一夏編

どうしてこうなった。

後ろを見てみると女子たちが好奇の目でこちらを見ている。はつきり言おう、つらい。

考えても見る、女子の群れに男は俺一人だけだぞ。状況だけを見るとつらやましいと思う奴もいるかもしれないがもう一度言おう、つらい。

なんでつらいのかつて？ それはな、教室中いや校舎全体が女子特有の甘い匂いで満たされているからだ。

そもそも何故俺だけしか男がいないのか。それを説明するには数年前とつい最近の高校入試まで遡らなければならない。

数年前俺の幼馴染である篠ノ乃箒の姉の篠ノ乃東さんが開発したマルチフォームスーツ『インフィニット・ストラトス』が発表された。現行兵器を上回る圧倒的な性能は世界を震撼させるはずだったが兵器として致命的な欠陥があった。

『ISは女性にしか扱えない』

この事実が分かったとき世界の関心は一気に萎えた。所詮は小娘が目立ちただけ、人々はそう結論づけた。

IS発表から1カ月後、日本を射程範囲内とするミサイル基地の

コンピューターが一斉にハッキングされ2000発以上のミサイルが発射される。約半数をIS『白騎士』が迎撃した。

それを見て『白騎士』を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破し死者は皆無。世界はたった二人の少女に敗北した。これを後の『白騎士事件』と呼ばれるようになる。この事件をきっかけにISの関心が再び高まることとなった。

そしてISの軍事利用を境に、ISの取引などを規制すると同時にISの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定『アラスカ条約』が締結、それに基づきIS操縦者育成施設『IS学園』を設立した。

法律も女性を優遇する制度に変わり男女平等社会から女尊男卑社会へと変わっていった。

中学3年の3月、俺は私立『藍越学園』の受験しに来ていた。千冬姉に生活費を一任していたためこれ以上負担をかけさせないために学費も安く、就職率もいいため受験することにした。

カンニング対策のために受験会場は2、3日前に開示する、という政府の意味不明な理由により俺は今、かなりあせっていた。

それにしてもここはどうしてこんなにも無駄が多いんだろうかと疑問に思ってしまう。

無駄に高い天井、ランニングコストのかかりそうな照明、そして意図不明の全面ガラス張り。

なめているんだろうか、この『常識的に設計しない俺かつこよくな？』みたいなノリは。全然かつこよくなえよ迷っちゃったよ。

まあ、ここでグチグチ言ってもしょうがない。次に目に入った扉を開けることにしよう、俺は大体それで正解なんだ。

がちや。

「君受験生？ それなら早く着替えちゃってね時間無いから。ここ4時までしか借りられないからやなのよねえ全く……」

中から忙しそうなお女性が出てきた。

相当急いでいたんだろう一氣にまくし立て行ってしまった。

それにしても着替える？ 何に？ カンニング対策のためにここまでやるのか。大変だな政府も。

奥のほうカーテンで仕切られていたのであけてみた、そこには着替え中の女子がいるわけでもなく、布団上の格闘技をやっているわけでもない。ただそこにあつた。

『インフィニット・ストラトス』通称ISが使われるその時をだた待っていた。

(男には使えないんだよな、たしか)

本来ISは、女性にしか扱えない。そう思って触れてみた。

キンッ！

刹那、頭に金属音が響いたと思った。た。らそこには全く別の世界だった。

五感は冴え、なぜか浮いている。目の前には『起動完了』の文字。

「ちよつと君何をやってるの………嘘」

次の一言で俺の人生は終わった。

「男がISを起動させるなんて」

その後起きたことは、まあ原作を読んでくれれば分かるだろう。ただ、とても面倒だった、と言っておこう。

そんなこんなで、俺の高校デビューが幕を開けたのだ。

プロローグ 一夏編（後書き）

感想・意見待っています。

レイヴンはまだ出てきません。今しばらくお待ちください。

アンケート

レイヴンの搭乗するACをIS化しようと思うのですが、アセンをどうするか迷っています。そこで！！ 皆さんにアンケートをとることにしました。この中から選んでください。

AC1 『深淵の狙撃手』

HH02 - WASP2

CCR - C75U2

AA09 - LEMUR2

LCR - LH89F

BS B03 - VULTURE2

FCS CR - F75D

GFUDOU

R RAGORA

EX CR - E82SS2

BR WB17R - SIREN3

ARR CR - WR81RS2

AL WL13L - GORGN

HR WH09H - WRATH

HL CR - WL79LB2

AC2 『舞姫』

HYH12 - WAYFLY

CCR - YC010/UL2

AA09 - LLEMUR2

LLH07 - DINGO2

BS B03 - VULTURE2

FCS MONJU

G G03 - OCHID
R RAGORA
EX CR - E82SS2
AR WR07M - PIXIE3
AL CR - WH01SP
HR WH09H - WRAITH
HL CR - WL79LBB2

AC3 アイアンハイド[『]
H H05HORNET

C CR - C83UA
A CR - A89AG
L CR - LT78A

FCS MONJU
G G03 - OCHID
R RAGORA

EX CR - E90AM2
BR CR - WB78GL
BL YWB35L - GERYON3

AR CR - WR93RL
AL WH04HL - KRSSW

HR YWH14PU - ROCC4
HL YWH14PU - ROCC4

AC4 あなたのACC(LRのみ)

ぜひ使ってほしい、という方はマセンとACC名を
ください。

AC5 全部でいいじゃん!!

に1機はすでに決まっています。

選んでください。ちなみ

1st Mission SHR(前書き)

レイヴンはまだですよ。

お待たせしました。本編です。

これは想像以上にきつい。

今はSHRの時間を使い自己紹介をしている。

俺の席は最前列のと真ん中。周囲の視線が痛い。

前回も言ったがこのIS学園では99%が女性だ。残りの1%は俺、織斑一夏だ。つまりハーレム。

この時点で『イラスト』ときた奴がいるだろうが、これが現実だ。諦めてくれ。

さて冒頭に戻るが、マジきつい。

まず俺に対する好奇の視線。それと逆の侮蔑の視線。この二つが精神的HPを削っている。

そもそもなぜ俺がここにいるんだろうか？（前回の話を見てくれ）

まあ、ISを起動させた時点で俺の人生は終わったんだけども起動させちゃったしなあ。やるだけやってみるか。

「織斑君！ 織斑一夏君！」

「は、はい、何でしょうか」

考え事をしていたせいで対応に遅れてしまう。回りからはクスクス、と笑いが漏れている。

「今、自己紹介で『あ』から始まって『お』の織斑君の番なんだよね。駄目かな？ やってくれるかな？」

この人は本当に先生なのか、と思う。子供が無理して大人の服を着ました的な風貌。メガネ若干ずれてるし。

「やりますから手を離してください」

「本当ですか？ 約束ですよ？」

先生の言葉を見無視し皆の方を向く。分かっていたが皆、俺を俺一人だけを見ている。ほとんどが何かを期待している目。

(箒は)

助けを乞う視線を向けると目をそらされた。この瞬間神は死んだ。しょうがない、俺も男だ腹をくくろう。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

突き刺さる視線の数々。『もつと喋ってよ』とか『これで終わりじゃないよね？』的な。何期待してるんだ？

「以上です!!」

ガタタ!

クラスの半分はずっこけた(箒も含む)。これでつかみは

ゴスツ!

頭に衝撃が走る。

「げえ、関羽！」

ドスツ！

今度は角で殴られた。いてえ。

「誰が三国志の英雄か馬鹿者。お前は満足に自己紹介も出来んのか？」

「いや、千冬姉、俺は……「もう一度逝つとくか？」……なんでもありません織斑先生」

凄い目で睨まれた。すげえ怖い。

……あれ？俺は今なんと言ったか。

『誰が英雄か馬鹿者』

『いや千冬姉、俺は』

あー。

「きゃー！本物の千冬様よー！」

「私はるばるここに受験したんです。北九州からー！」

「私、あなたの為なら死ねます！」

突如起こった衝撃波ソニックウェーブもとい黄色い悲鳴。これだけはいつ聞いても慣れるもんじゃない。慣れてるやつは、もてる奴か神かのどっちかな。俺はどっちでもないけど。

「静かにしろ。全く毎年よくこれだけの馬鹿共が集まるものだ。それとも、私のクラスに集中させているのか？」

ここでまた黄色い悲鳴。千冬姉は鬱陶しそうに見ていた。

「静かにしろ、と言ったはずだ！」

教室がしん、と静まり返る。

「ふん。まあいい。」

諸君、私が織斑千冬だ。私の仕事は若干15歳を16歳まで鍛え上げることだ。私の言葉はよく聞き、理解し、実行しろ。理解できない者は従え。いいな」

『はい！！』

「よろしい。では授業を始める。次の時間までに用意しておくように」

大丈夫なのか？ 俺の高校生活。

1st Mission SHR(後書き)

次話辺りで出そうと思います。

2nd Mission プライド(前書き)

すいませんしたあ!!

今日中に投稿するとか言ってたくせに1日遅れ。

誠に申し訳ありません。

2nd mission プライド

こんにちは、おりむらいちかです。勉強難しいね。P I Cやら三パス・ケツリトター次元躍動旋回やら日本語しゃべれよ。こんなことで大丈夫なのか？

やっていけるのか？

てか俺を見てて飽きないのか女子たちは時折きゃーきゃー言っている。話しかけたい、でも恥ずかしいといった感じになっている。

「ちよつといいか」

心で泣いていると声をかけられた。顔を上げると篝　　I S 開発者の篠ノ乃東の妹であり俺の幼馴染　　が立っていた。

「別にかまわないぜ」

そう言って篝に着いていく。俺が通ろうとするとモーゼの如く人が避けていく。

着いたのは屋上。快晴だ。と言っか篝よ、自分から呼び出しておいて一言も話さないというのはどうなんだ。よし。

「この前の剣道の全国大会優勝だってな。おめでとう」

「なぜそれを知っている！」

「たまたま新聞読んだらあったんだよ」

「なぜ新聞を読んでいる！」

え？　　当たり前だろ？　　駄目なの？

「ま、まあ久しぶり。六年ぶりだけど篝ってすぐ分かったぞ。髪型一緒だし」

「あ……。よく覚えているものだな」
「忘れるかよ。幼なじみだぜ」
「……………」

睨まれた。なんかしたか？

キーンコーンキーンコーン。

お？　今のは予鈴じゃないか。まずい早く戻らなければ脳細胞が死んでしまう。

なんとか本鈴には間に合い着席。授業の内容は『IS〕基礎基本』
どんな単元だよ。

「では授業を始めたいと思います。教科書の8ページを開いてください」　(汗)

さっきの授業でもそうだったが開くと意味不明な単語ばかり。なんだよサークルロンドって。

え？　分からないなら何で前るとき聞かなかつたのかつて？
恥ずかしいだろ。『分からない人いますか』と聞かれたならまだしも手挙げて『分かりません！』なんて言ったら絶対笑われる。

隣の女子を見ると熱心にノートをとっていた。

「な、何かな？」

「ああ、何でもないんだ、ゴメン」

「そう……………」

「この時点で誰か分からない人いますかー」

……………！　来た！　拳げるぞ。

「先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど、全部、分かりません！」

しーん。

あれ？ 何で急に静かになるんだ？

「全部ですか。……この時点で分からないという人はいませんか？」

しーん。

再びの沈黙。これは「え？ 分かりますよ？」という意味なのか？ 本当に理解できているのか？！ ここで分からないところをなくしておかないと後で絶対後悔するぞ。

「織斑、入学前の参考書は読んだか」

はて、参考書……。お！ あの『タウ〇ページ』みたいなやつか。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパァン！！ 直後、頭部を襲う衝撃。いてえ。

「必読と書いてあったろうが馬鹿者。あとで再発行してやる。一週間以内に覚える、いいな」

「いや、一週間であるの分厚さはちょっと……」

「やれ、と言っている」

「はい、やります」

即答した。怖かったんだ、しょうがない。あれは悪魔だと俺は思うね。

「ISは機動性、攻撃力、制圧力と従来の兵器を遥かに凌ぐ。そうした兵器を深く知らずに用いれば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できなくても覚えろ、そして守れ。規則とはそういうものだ」

全くです。参考書云々ではなく、そういったことが大事なんだと思う。

うん。がんばろう……。

結論。がんばれそうにない。やはり参考書を読まなかったのが痛かった。全っ然わからねえ。もらったら即効で覚えよう。

「ちよつとよろしくて？」

「は？」

3時間目の休み時間。俺はさらに疲労を蓄積することになる。苦手なんだよなあ、こういついかにもな女子は。

「まあ！ 何ですのそのお返事は。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なことなのですからそれ相応の態度と言つものがあるのではないのですか？」

「……………」

さっきも言ったが、俺はこういう奴は苦手だ。いや『嫌い』と言ったほうが正しいかもしれない。

目の前にいる奴は大きな勘違いをしている。確かにISは強い。それこそ3日で戦争を終わらせることが出来るくらいに。だがそれはISを展開していればの話。していなければただの女となら変わりはない。

「ああ、ごめん。俺、君が誰だか知らないんだ」

まあ、普通に名乗ってもいない見知らぬ奴に話しかけられて光栄に思え、と言うのが無理なだけでも。名前教えてもらえると助かる。

「私を知らない?! イギリスの代表候補生にして入試主席であるこの、セシリア・オルコットを?!」

「あ、質問いいか」

「下々の要求に答えるのも貴族の務めですわ」

「代表候補生って何？」

ガタタツ！ 後ろで数名がずっこけた。

「貴方、本気でおっしゃっていますの？」

「おう、知らん」

「呆れましたわ。テレビがないのかしら。」

失礼な、テレビならあるぞ。見ないけど。

「で、代表候補生とは」

「読んで字の如くですわ。考えれば分かるでしょう」

「おおなるほど、確かに。所謂エリートというやつだな」

「そうエリートなのですわ!」

お、復活したぞ。

「本来ならこのわたくしとクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。そこを理解していただける？」

「へー。らっきーだなー」

「馬鹿にしていますの？」

いやお前が言ったんじゃない。

「だいたい、貴方ISのことも知らないでよくこの学園に入れましてわね。唯一男でISを使えると聞いて少しは知的さを感じさせると思いましたが、期待はずれですわ」

「男の俺にISについて理解しろ、というのが無理なんじゃないか？　今まで触れる機会もなかったんだし。……ていうか、期待されても困るんだけど」

「まあでも？　わたくしは優しいですから。泣いて頼まれたら操縦くらいは教えて差し上げないこともなくてよ。何せわたくしは唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから」

これが優しさだったのか。新しい、惹かれはしないけど。

「それなら俺も倒したぞ。教官」

「は？」

俺の言葉に目が点になるオルコットさん。

「わたくしだけと聞きましたが」

「女子では、ていうオチじゃないのか」

ビシッとヒビが入ったような音が聞こえた気がした。疲れてるな

あ。

「貴方も倒したというの」

「うん？ まあ多分」

アレは倒したとは言えるのかどうか怪しい。何せ急に突進してきて避けたら壁に激突して、そのまま動かなくなったんだからな。

「多分？ 多分とはどういう意味ですか?!」

IS素人が教官を倒したという事実が些か信じられないのだろう。少しづつさ。

「まあ少し落ち着けて」

「これが落ち着いていられますか!」

キーンコーンカーンコーン。

ここでチャイムが鳴る。さあ授業だ。

「またあとで来ますわ。逃げないことね。よくって」

よろしくない。そう心の中でつぶやき授業の準備に入る。

「では、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

この時間は山田先生ではなく千冬姉が担当するようだ。よほど大事なことなのか山田先生までノートを持っている。

「ああその前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めな

ければいかな」

え？　嘘だろ？　何か嫌な予感がする。

「クラス代表とはそのままの意味だ。クラス対抗戦の出場だけでなく、委員会への出席などもやってもらう。自薦他薦は問わない」

「はい！　織斑君を推薦します」

ほら、やっぱり。

「私も織斑君がいいと思います」

それからどんどん俺に票が集まっていく。

ガタツ！　俺は言った。

「俺はやらないぞ！　こんな面倒なこと何かごめんだ！　俺はオルコットさんを推薦させてもらう。実力からして彼女がトップだ」

すると、セシリアさんは待っていましたとばかりに偉そうに且つ勢いよく立ち上がった。

「そうですね！　クラス代表は実力トップがなるべき、そして相応しいのは、わたくしですわ！　それを珍しいとかという理由で極東の猿に任されては困ります！　だいたいわたくしはISの修練に来たのであって、サーカスをする気はありません。しかも文化としても後進的な国で暮らすだけでも屈辱的ですのでこれ以上の屈辱をわたくしに受けさせるつもりですか？！」

カチーンとキタね今のは。ここは一発言っておかなければいけない。

「チツ。イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

黙っていれば、日本？ 何それおいしいの？ 的なセリフ吐きやがって。思わず口が滑ってしまった。

「貴方ねえ、わたくしの祖国を侮辱しますの?!」

「先に言ってきたのはそつちだろうが!」

「……決闘ですわ!!」

「ああ良いぜ。四の五の言つより分かりやすい」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いいえ奴隷にしますわよ!」

「上等だ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない……でハンデはどれくらいつける」

「あら、早速お願いかしら?」

「いや、俺のハンデに決まってるだろ」

直後、クラスが爆笑の渦の包まれる。

「織斑君それ本気で言ってる? 男が女より強かつたなんて昔の話だよ?」

「確かに織斑君はISを使えるかもしれないけれどそれは言いすぎだよ」

みんな本気で笑っている。

俺は忘れていた。今の男性は弱いということ。腕力は何の役にも立たない。

確かにISはごく限られた女性にしか操縦は出来ないが全ての女性が潜在的にISを操縦する能力を持っている。それに対して男性

は全くといっていいほどISを起動できない。もし、仮に女性と男性が戦争をしたら3時間で制圧されかねないという。それほどまでにISが与えた影響力は大きいのだ。

「……なら、いい」

「ふふっ　　そうでしょうむしろわたくしがハンデをつけるか迷ってしまいますわ。日本の方はジョークセンスがあたりですね」

「話は纏まったか。では1週間後にクラス代表決定戦を第3アリーナで行う。各々準備を怠るなよ」

こうして俺の初陣が決まったのであった。……………どうしよう！

!!!!!!!!!!

2nd Mission プライド(後書き)

活動報告にも書きましたが、PS2のACでだれか出してほしいレイヴンはいますか？ 一応トップランカーは全て出します。あとL Rのレイヴンも数名。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8606x/>

IS インフィニット・ストラトス ~その意思が全てを変える~

2011年12月4日23時51分発行